NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

余話　雨上がり

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17756881

ダイの大冒険, アバン, 子ヒュン, ヒュンケル, 誇りの一番弟子

予定外の小話。
１ページ目は本編６ novel/15403663と７novel/15406332の間。
先生と子ヒュン。
強いつながりがあるのは、本編６のみ。
２ページ目は、戦後。カール騎士団所属のヒュンケルと王配アバン。

ヒュンアバ・アバヒュンオンリーイベント「誇りの一番弟子」の６月お題「狐の嫁入り」に沿ったもの。
企画合わせに続きものを出してしまってすみません・・・。
天気雨→狐の嫁入り→狐火（鬼火）ときたら、もうコイツしか思いつきませんでした・・・。

2023.6.26　イラスト掲載
天祢様user/948462に素敵なイラストをいただきました～!!!!オレンジ色のアイツです。ラストに掲載させていただきました。
にじのふもとでアイツはどんな顔をしてるんでしょうか。
めちゃめちゃ嬉しかったです!!ありがとうございました!!

Table of Contents

余話　雨上がり

　その街道は、どこまでもまっすぐに進んでいるように見えた。
　道のはるか先には、森の影が見える。もうすぐ、森に差し掛かるのだろう。
　ロモスの内陸部は、うっそうとした木々の生い茂る森が多く、その隙間を縫うように街道が張り巡らされていた。
　アバンの友人一家が住むという村を目指し、少年ヒュンケルは、アバンとともに、街道を進んでいた。ヒュンケルの肩の上には、いつもどおり、この旅の同行者であるオレンジ色のゴーストがふわふわと漂っていた。
　ヒュンケルは、ふと、髪に水の当たる感触を感じた。
　彼は空を見上げた。
　だが、上空は、雲ひとつない青空だった。
　山の天気は変わりやすいというが、森の天気もそうなのだろうか。
　ヒュンケルが首をかしげると、アバンも足を止めて、彼を振り返った。
「どうかしましたか、ヒュンケル。」
　ヒュンケルは、アバンに視線を向けず、空を見上げたまま答えた。
「いえ・・・雨が降ったような気がして・・・。」
　その彼の言葉に、アバンも空を見上げた。
　だがやはり雲はない。
　アバンもつぶやいた。
「いいお天気ですけどねえ・・・。」
　そうしているうちに、また、ぽつりと、ヒュンケルは、髪に水を感じた。
　ヒュンケルは、掌を空に向け、水平に突き出した。晴天ではあるが、雨が降っているような気がしてならない。
　そうしているうちに、ぽつり、ぽつりと、ヒュンケルの掌が、雨粒の感触を感じた。

ヒュンケルは、アバンに訴えた。
「うわっ！やっぱり降ってますよ、先生！」
　すると、アバンは、困ったような笑みを浮かべて、自身の頭を両手でかばった。
「いいお天気だったので、油断していました。走ります！
　行きますよ、バケル！」
「オッケー！」
　アバンが、傍らのゴーストのバケルに声を掛けると、バケルは、勢いよく返事をした。アバンが走り出すと、バケルもその後をふわりと舞い、ついてゆく。
「あ、ちょっと、先生ッ！！」
　ヒュンケルは、慌てて二人の後を追った。

　３人は、街道脇の大樹の下までたどり着くと、そこで足を止めた。
　ここで雨宿りをしようと思ったのだ。
　ヒュンケルは、頭を強く振って、髪の水分を振り払った。彼の銀の髪は、まだ柔らかく、軽い。ふわりと、その髪が風に舞い、その髪を濡らした雨粒を追い払った。
　ヒュンケルは、息を吐くと、木の葉の隙間から空を見上げた。
　だが、その目に映るのは、雲一つない蒼天だった。
　そこから、ぱらぱらと小雨が降り注いでいた。
　ヒュンケルは、不思議そうに首を傾げた。
　少年の疑問に気付いたのか、アバンが答えた。
「ああ、天気雨ですね。
　すぐに止みますよ。」
「天気雨？」
　ヒュンケルはアバンに聞き返した。
　アバンはうなずいた。
「ええ。こうやって、晴れているのに降る雨のことを天気雨って言うんです。
　地方によっては、狐の嫁入りって言うんですよ。」
「・・・狐？」

ヒュンケルは、ますます不可解そうに眉をひそめた。
　対してバケルは、機嫌がよさげにくるりと宙返りをして、アバンの周りをふわふわと漂っている。
　アバンは、微笑んだまま、言葉をつづけた。
「そうなんです。
　狐のお嫁さんは恥ずかしがり屋だそうで、その花嫁行列を見られないように狐が雨を降らせている、それがこの天気雨だっていう言い伝えなんですよ。」
　アバンの説明を聞き、ヒュンケルは、いっそう不快げな色を面に浮かべた。
「・・・なんですか、それ。」
「え、かわいいじゃないですか。
　恥ずかしがり屋の狐のお嫁さんなんて。」
「胡散臭すぎます。」
「手厳しいですねえ。」
　困ったように眉根を下げ、アバンは苦笑した。
　アバンは声の調子を変えると、ほんの少し、話題を変えた。
「そうそう、ヒュンケル、狐の嫁入りには、地方によっていろいろな言い伝えがあるんですよ。」
「言い伝え？」
「例えばですね、今お話ししたみたいに、こういう天気雨が狐の嫁入りだという地方もあれば、夜、遠くの山に、狐火がいくつも見えるときに、狐の花嫁行列が通っている、という地方もあるんですよ。」
　アバンの語る内容に、ヒュンケルは興味なさげに空を見上げた。
　だが、アバンは、そのまま言葉をつづけた。
「豪勢な地方になると、この話を合わせたような伝承のある地方もありましてね。
　夕方、天気雨が降ると、それは、狐の嫁入りの予告だと。その日の夜に、花嫁行列が通るから、見ないでおくれという意味だとね。
　そして、その日の夜は、遠くに狐火が見えるそうです。それが、狐の花嫁の提灯行列だそうなんですよ。
　狐火は、鬼火とも言いますね。」

「遠くの狐火・・・ですか。」
　ヒュンケルは、ぽつりとつぶやくと、傍らのバケルに視線を止めた。バケルもヒュンケルを見る。
　なんとなく、視線の交錯した二人の意見が一致したようだった。
　ヒュンケルはアバンに尋ねた。
「先生、それって、こいつらじゃないんですか？」
　右手の親指を向け、バケルを指す。
　バケルは、その小さな両手を体の前で合わせ、呪文を唱えた。
「メラ。」
　バケルの手の間に、小さな炎が生まれた。
　アバンは、バケルと初めて会った時のことを思い出し、笑みを漏らした。
「ああ、なるほど！ゴーストのメラの炎ですか。」
　アバンは大きくうなずいた。
「確かにそうかもしれませんねえ。」
「狐でも何でもないですよ。
　だいたい、そんな魔法が使えたり、行列作ったりする狐なんて、あり得ないですよ。」
　いやに現実的な、子どもらしくないヒュンケルの言葉に、アバンは苦笑した。
　すると、バケルが、ヒュンケルに呼びかけた。
「ヒューーン。」
「なんだよ。」
　ヒュンケルがバケルを見ると、彼は、両手の間で作ったメラの炎をヒュンケルに投げつけた。
「・・・ッ！」
　とっさに、ヒュンケルが頭を下げてその炎をかわした。
　体は傷付かなかったが、そのプライドが、傷付いた。
「・・・おい、バケル、やるのか！？」
　いきなり臨戦態勢になった二人に、アバンは、その間に入ってとりなした。
「あー、こらこら、ケンカはいけませんよ。」
　ヒュンケルがバケルに突っかかろうとしたところ、アバンが、そ

の大きな右掌を突き出し、ヒュンケルを制止した。
　ヒュンケルは、むっとした顔でアバンを見上げた。さすがに８歳のヒュンケルでは、腕力でアバンにかなうはずがない。
　アバンは、幾分、苦笑すると、ヒュンケルに答えた。
「まあ、あなたの言うとおりかもしれませんね。狐じゃないかもしれません。」
　だが、アバンは、彼の言葉も自分の言葉も否定することなく、そのまま話をつづけた。
「もっとも、各地方に伝わる言い伝えには、独特の意味があったり、はっきりとは伝えられない隠れた歴史が姿を変えたものだったりすることもあるんですよ。
　その意味を考えると、興味深いですよ。」
「そんなもんですかね・・・。」
　アバンの言葉の意味を実感できず、ヒュンケルは、頭をかきながら曖昧な返事をした。
「それより先生、なんで晴れているのに雨が降るんですか？雲がないのにおかしいじゃないですか。その理由の方が気になります。」
「それはまた今度、お話しますよ。
　いまは、狐のおよめさんのお便りだと思っておきましょうか。」
　なんとなく、煙に巻かれたような気がして、ヒュンケルは不満げに口を尖らせた。
　アバンは、そんなヒュンケルを気にせず、いつも通りの穏やかな笑みを向けた。
　アバンは、空を見上げた。
　雨の粒子がはらはらと落ちてくる。霞のような雨だ。
　だが、空は、変わらず、雲一つない青空だった。
　その蒼天を見上げながら、アバンはつぶやいた。
「晴れた日に降るお天気雨は、狐のおよめさんのお便りさ。
　恥ずかしがり屋のおよめさん。
　今晩お嫁に行くのだから、見ないでおくれというしるし。
　晴れた日に降るお天気雨が出た夜は、遠くの山に鬼火が見える。
　点々と続く鬼火はね、狐のおよめさんのちょうちん行列。」
　その弾むような口調に、いつの間にか、ヒュンケルも聞き入って

いた。
　それは、きっと、どこかの地方の言い伝えなのだろう。
　アバンの歌うような声を聴きながら、ヒュンケルもまた、雨を降らせる青空を見上げていた。
　それから、どのくらいが経っただろうか。
「ア！」
　バケルが大きな声を上げた。
　その小さな指が、遠くの一点を指し示す。
　バケルの指さす先を見て、ヒュンケルはつぶやいた。
「・・・虹。」
　遥か彼方の大地から、まっすぐ、立ち上がるように、７色の光のスペクトラムが空へと昇っている。
　アバンは、すっとヒュンケルの脇を通ると、木陰から外に出た。
　そのまま、空を見上げる。
　そして、アバンは、ヒュンケルを振り返った。
「雨が止んだみたいですね。
　ヒュンケル、虹のふもとまで歩いていきましょうか。」
　ひどくロマンチックなその言葉に、ヒュンケルは苦笑した。
　だが、アバンに反抗する気も起きず、この日は笑みを浮かべたまま、アバンの後を追って歩みを進めたのだった。

　師との旅のひとときだった。

　ヒュンケルは、初夏の日差しに暑苦しさを覚え、軍服の襟元を緩めた。
　公務中の今は、あまり大っぴらに着崩すことはできない。
　詰襟の隙間から内に籠った熱を逃がすと、ふうと一息ついた。
　ヒュンケルは、自身が警護する背後の屋敷にちらりと目をやった。
　自分と同じカール正規軍の軍服を着た騎士が、一定間隔をあけて、この街の領主の屋敷を取り囲んでいる。静かなカール東部の田舎町には不似合いな、物々しい光景だった。
　それもそのはずだ。

いま、ここには、カール王室より、貴賓が来ているのだ。
女王フローラに王配として迎えられて間もないアバンが、女王の名代として、この地方の視察に来ていた。
カール王国近衛師団に所属しているヒュンケルは、他の騎士とともに、アバンの警備に当たっていた。
ダイを探す旅に出る前、アバンは、ヒュンケルに、カールに来るように言った。そして、その旅から戻ったのち、約束をたがえなかった愛弟子を、アバンは、騎士として遇した。
騎士団の中でも、特に女王直轄の近衛師団に配属されたヒュンケルは、公務としてアバンに随伴し、その警護に当たることが増えていた。
今日もまた、同様であった。
ヒュンケルが視線を上に上げると、初夏の真っ青な空が澄み渡り、どこまでも広がっていた。雲一つない、いい天気だった。
だが、暑い。
いっそ一雨来てくれればと、ヒュンケルは思った。
不満を言っても仕方がない。
ヒュンケルは、視線を下げると、ふうと息を吐いた。そして、意識を仕事に戻し、切り変える。
ヒュンケルは、戦士特有の目つきに戻ると、異常はないか、さっと、周囲の様子に意識を向けた。
ふとそのとき、警備に当たっているこの屋敷の向かいの家に目を向け、ヒュンケルはそこで視線を止めた。
その家の前には椅子があった。
家の前に椅子を出し、老婆がそこに腰を下ろしていた。
深く皴の刻まれたその面からは、正確な年齢さえも読み取れなかった。
老婆は、ちょうど屋根の影になる位置に腰を下ろしていた。そのせいで、強い日差しを感じずに済んでいるのだろうか、心地よさげにうつらうつら、船をこいでいた。
眠っているのかと思いきや、時折、目を開けて、空を見上げ、あるいは、周りを見渡したりしている。
その様子がひどく緩慢ではあったが、微笑ましい。ヒュンケル

は、柔らかい視線を送り、その老婆の動きを視界の隅に止めていた。
　老婆は、また空を見上げたが、そのまま立ち上がりかけた。
　そのとき、彼女はバランスを崩した。
　その身体が、椅子から転げ落ちそうになる。
　ヒュンケルは、慌てて飛びだすと、その皺の刻まれた体を抱き留めた。
　幸い、それだけの瞬発力を、今でもヒュンケルは維持していた。
　老婆の体が地面に落ちるよりも早く、その身を左腕で抱き留めると、ヒュンケルは、老婆に言葉をかけた。
「いかがされましたか、刀自。」
　その古めかしい言葉遣いに、老婆は、驚いたように顔を上げた。
　そして、自分を受け止めたのが若いカールの騎士だと気付くと、老婆は穏やかに笑みを浮かべて礼を述べた。
「お若い騎士様。どうもありがとう。」
「いえ。」
　ヒュンケルは、短く答えると、彼女の身体を抱え、椅子に座り直させた。
「どうかされましたか。何か気になるものでも？」
　ヒュンケルは、老婆が急に立ち上がったので何かをしようとしているのだろうと思った。
　立ち上がろうとしてバランスを崩したところを見ると、少し足が不自由なようだ。
　すると、老婆は、再び空を見上げた。ぽつりと、細い声で彼に答えた。
「雨が降ると思ってね。」
　ヒュンケルは、つられて空を見上げた。
　先ほど見たばかりと同じ、雲一つない蒼天だった。
　老婆の語る意味が分からず、ヒュンケルは首を傾げた。
　老婆は再び口を開いた。
「遠くで、水の匂いがするんだよ。だから、もうじき雨が降るんじゃないかってね。」
「・・・雨、ですか。」

ヒュンケルは、言葉が返せず、そのまま老婆とともに空を見上げていた。
　老婆はそれきり口を閉じた。
　ヒュンケルも何もかける言葉もなく、しばし黙って老婆の隣にたたずんでいた。
　この位置からでも警備対象の屋敷は、目に入る。こちら側に立っていても問題ないだろう。
　そう判断したヒュンケルは、そのまま老婆の隣にいた。また転倒しそうになったらその方が心配だったからだ。

　二人とも黙ったまま、しばらく沈黙が続いた。
　どのくらいの時間が経っただろうか。
　ふと、ヒュンケルは、髪に水の感触を感じた。
　不思議に思って空を見上げるが、やはり雲はない。
　ヒュンケルは、掌を水平に前に突き出した。
　何も感じない。
　気のせいか。
　そう思った瞬間、ぽつりぽつりと、掌に、雨粒の感触を感じた。
　雨が降り始めていた。
　ヒュンケルは、驚いて傍らの老婆に視線を向けた。
　老婆は、やはり小さな声でつぶやくように、独り言つ。
「ああ、やっぱり降ってきた。
　狐のおよめさんが来るねえ。
　きっと、今晩は、鬼火が出るよ。」
　どこかで聞き覚えのある表現に、ヒュンケルは聞き返した。
「・・・それは、この地方の言い伝えなんでしょうか。」
　老婆は、ヒュンケルを見上げることはなかったが、彼の言葉は聞こえていたようだった。彼女は黙ってうなずいた。
　そしてまた、老婆は、独り言のように、細い声でつぶやいた。
「晴れた日に降る雨はね、狐のおよめさんからのお便りだね。
　恥ずかしがり屋のおよめさん。
　今晩お嫁に行くからね。
　見ないでおくれというしるし。

お天気雨が出た夜は、遠くの山に鬼火が光る。
　点々と続く鬼火はね、狐のおよめさんの花嫁行列。」
　老婆は、歌うように、呟いた。
　その節と言葉が、ヒュンケルの遠い記憶を刺激した。
　どこかで聞いたことがある。
　ヒュンケルは、記憶をたどりながら、老婆に対し、ぽつりと、言葉を投げかけた。
「同じ言い伝えを、昔、師から聞きました。」
　すると、老婆は、ゆっくりとヒュンケルを見上げた。
「騎士様のお師匠様、カールの人なのかね？」
「はい。
　私の師が、その言い伝えをどこで聞いたのかまでは知りませんでしたが、カールの話だったのですね。」
　老婆は、遠くに見える山の影を指さし、ヒュンケルに語った。
「ちょうどあの山の辺りかね。
　だいぶ昔に、今日みたいにお天気雨が降った日の夜にね、鬼火がゆらゆらと並んでいたんだよ。」
「そうですか・・・。」
　ヒュンケルは、記憶をたどりながら、アバンとの会話を思い出していた。
　まだ彼が幼かったときに、アバンと同じような話をした。
　あのときには、彼らは３人だった。アバンとヒュンケル、そして、彼らの旅の同行者がいた。
　まだ子どもだったヒュンケルは、あのとき、狐火は、狐の花嫁行列ではなく、ゴーストのメラの炎じゃないかと言ったものだ。
　懐かしさに、ヒュンケルは目を細めた。
　すると、いつの間にか、雨がやんでいた。
　老婆の声が聞こえる。
「上がったね。」
「ええ。」
　視線を交わらせることはなく、だが、ヒュンケルも、老婆に答える。
　頭上に目を向けると、やはり、雲一つない青空が広がっていた。

本当に、狐につままれたような天気だった。
ふと、ヒュンケルは、遠くの空に先ほどとは違う光景を見た。
７色の光の柱が天へのアーチを描いていた。
ちょうど、さきほど老婆が指さした山の辺りから、空へと橋が架かっている。
「虹だね。」
老婆の声が聞こえる。
ヒュンケルの幼い記憶がよみがえる。
あのときも、こんな風に、雨上がりに虹が出た。
「天気雨は止みましたか。
ああ、虹が出ていますね・・・。」
聞き覚えのある声に、ヒュンケルは振り返った。
いつの間にか、アバンがそこに立っていた。
「先生。」
アバンは、にっこりと微笑むと、ヒュンケルの傍らの老婆に膝をついた。
「御子息と、お話をさせていただきました。
今後の、この街の運営とそれに対する支援のお話です。
どうぞ、今後とも、お見知りおきを。」
アバンの言葉に、ヒュンケルは面食らった。
ただの老婆かと思ったが、どうやら、アバンが話をしていたこの街の領主の母親のようだった。
老婆の方も、アバンの言葉に、にこにこと笑みを浮かべていた。
アバンは、ヒュンケルに向き直ると、礼を述べた。
「ヒュンケル、御母堂の警護、ありがとうございました。」
「・・・いえ。」
偶然、老婆に付き添っていただけのヒュンケルは、曖昧に返事をした。
アバンは、空を見上げると、懐かしそうに目を細めた。
「それにしても、天気雨、ですか。以前もこんなことがありましたね・・・。」
「覚えているんですか？」
「当たり前じゃないですか。

小さかったあなたとの大切な思い出ですよ。」
　アバンは、当然のようにそう言った。そしてまた、懐かしそうに、そして、どこか嬉しそうに、言葉をつづけた。
「あのとき、あなたは、狐の嫁入りなんて胡散臭すぎるって言っていましたね。
　種明かしをしちゃいますとね、天気雨は、遠くで降った雨が風に飛ばされてきているんですよ。風花（かざばな）と一緒です。」
　そう言えば、あのとき、ヒュンケルはアバンに、天気雨の原理を教えろと言った。十数年を経て、アバンはその約束を果たしたようだった。
「そうだとしても、言い伝えには意味がある、そうでしたね、先生。」
「おや、ずいぶん柔軟になりましたね。」
　以前、自身が語ったことを返され、アバンは意外そうな顔をした。
「天気雨の降った日の夜に狐火が出るというのは、この地方の言い伝えだったんですね。こちらでは、鬼火と言うんですね。」
「ああ、そうですね。」
「それなら、今日の夜、狐火が出るかもしれませんね。」
　ヒュンケルは老婆に尋ねた。
「あの山の辺り、ですか？」
　老婆は頷き、遠くの山を指さした。
「ああそうだったね。
　ちょうど、虹のふもとの辺りに以前、見えたね。」
　その皺の刻まれた指の先がさすところを視界に映し、ヒュンケルはアバンに語り掛けた。
「その狐火は、ゴーストのメラの炎かもしれないと、あのとき、俺は言いました。
　もし、本当にそうなら・・・あの山の虹のふもとに、アイツがいるのかもしれない。
　そんな気がします。」
　名前を上げずとも、ヒュンケルが誰のことを差しているのか、アバンにはすぐに分かった。

「そうですね・・・。」
　そう言って、目を閉じる。
　瞼の裏に、あのオレンジ色の陽気な顔をした、彼らの旅の仲間の姿が浮かんだ。
　アバンは口の端を上げ、笑みを浮かべた。
「あの子なら、虹の向こうまで飛んでいっちゃいそうですからね。」
　ヒュンケルも、笑みを漏らした。
　いつのころからだろうか。
　思い出すのも辛かったはずの、バケルとの思い出が、温かなものとしてよみがえるようになった。

　ヒュンケルは、再び虹を見上げた。
　七色の光の柱の向こうに、少年だった日の思い出と、あの頃の友だった、アイツの姿がある。
　ヒュンケルは、バケルの姿を思い浮かべながら、少年の頃の記憶を、そっと胸の中にとどめた。

ひゅーん

イラスト：天祢様（https://www.pixiv.net/users/948462）